

広報
市民リポーター
だより
⑤

黒鉱の町を

黄金のふる里へ

伊藤正行リポーター (美園町)

「黒鉱の町を黄金のふる里へ」。何とはなしに、ロマンを感じさせる言葉ではありませんか。鉱山の町、我が大館市は、古くから地下資源の豊かな地域として、林業や農業とあわせ鉱業の町として、経済の発展をそこに依存してきました。では、なぜ今、黒鉱の町を黄金のふる里に変えねばならないのでしょうか。今回は、新しい地場産品の開発と、その育成に心血を注いでおられる、秋田資源開発建設事業協同組合の専務理事、長尾智さんを取材しました。

地場産品へ 新製品

黒鉱とは、皆さんが良くご存知のとおり、黒い鉱石であることから、その呼称がついたものです。鉛、亜鉛、重晶石を主として、金、銀、銅、ビスマス、ガリウム等、各種の有価金属特にガリウム等は、エレクトロニクス分野において希少金属と称されるに富み、このため地下資源に乏しい我が国にとって重要な非鉄金属供給源となつてい

ます。ところが、最近の円高の定着によりコスト高となり、海外輸入の方が需要者にとって割安となったために、昨今の地元の閉山や合理化という事態になってしまいました。そこで、地元から産出される黒鉱に含有される金、銀を活用して指輪、ペンダント、ブローチ等の装身具を製作し、新地場産品として定着させようという取り組みが「黄金のふる里」づくりだとのことでした。

暗中模索の 5年間

この事業は、昭和五十三年制定の特定地域振興事業法に基づき、昭和五十八年から国、県、市の指導と援助を得てスタートしたのですが、本来、同組合は鉱業振興を目的として同和鉱業(株)の関連企業二十五社で結成された組織であるため、いわば畑違いの事業を手がけられた長尾さんたちのご苦労は、暗中模索の五年間であり筆舌に尽くし難いものがあつたようです。

この間、彫金技術者育成のた

め、彫金技術界の最高峰をいく方を東京から講師に招き、定期講座を開設。今春二十人の受講者中、十六人が研鑽のかいあって卒業され、調金技術者として誕生しました。また、今年の三月をもって国、県からの補助が終了したこともあり、いよいよ独立企業化を計る時期を迎えました。

今後の課題は、製品化できるようにになった技術とデザインの更なる質的向上と、固定販路の開拓にあるようです。



▶長尾さんから取材する伊藤リポーター(左)

ビジネスとして 軌道に

同組合では、組織を本来の業務と新事業の「黄金のふる里」事業部門とに分割し、六十四年度から新事業に販路開拓担当者一人、事務担当者一人を配置させるべく、本年をテストケースの年と位置づけて努力しているとのことでした。幸い、現在までに、資金を要する貴金属・宝石の研磨、メッキ装置のたぐいの生産設備関係が整備されました。特に、毒物であるシアンを必要とするメッキ工程は、最近操業を始めた同和クリンテックスを活用できるために、五百万円は必要という浄化装置問題を解決できたことが、今後の生産体制に光明をもたらしました。

また販路開拓面においては、これまでにN.T.T.、東北電力の協力を得て、各地営業所での職場販売を実現し、地元では大館健康ランドへの固定出展、並びに大館物産振興会を通じてジャスコの凍結床面に展出中ですが、今後はメインランド尾去沢内や、秋田空港ロビーに展出・販売の計画もっています。さらに、地元の貴金属小売業界の打撃にならないよう、組合はメーカーの立場として市当局を含めての三者連絡協議会をつくり、

互いの共存共栄を図る配慮も忘れていません。今年実現した、大館・渋谷駅とのハチ公姉妹交流を基に、秋田犬をデザイン化した製品をもってJ.Rのルートを活用していくことも検討中であり、着々とビジネスとして軌道に乗せる布石が打たれているようです。

新事業開発の ロマン

私は、今後事業協同組合化を志向し、受注から製作、販売と一貫した体制づくりが望ましいと思いました。何といつても、自治体の補助金の投下だけに終わらせないバックアップと、地元の人々の暖かい理解が必要で、新地場産品の誕生を共に喜び合い紹介する場として、十月八九日の両日、(社)青年会議所主催の県北産品交流市への出展を通して、地元の人々に実物を展示販売する中で、その評価を問いたいとのことでした。

七十歳を過ぎて、なお新事業開発のロマンに燃える長尾専務の「まだ老け込んでないから残りたい」との言葉が、さわやかに心に残りました。

我が郷土大館の活性化のために、「黄金のふる里」事業が見事に結実されることを祈らずにはいられません。